



Title	「本が読み始められた」と「本が読まれ始めた」について
Author(s)	西川, 真理子
Citation	大阪大学言語文化学. 1995, 4, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78134
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「本が読み始められた」と「本が読まれ始めた」について*

西川真理子**

This paper will examine two different meanings of "-hazimeru"; "the beginning of actions" (-hazimeru(A)) and "the occurrence of events" (-hazimeru(B)) (Shibatani 1978). In so doing, we will see passives rather than actives, since passives help to distinguish these two meanings.

We will assume that the semantic difference is relevant to the events to which "-hazimeru" refer. When we deal with a single event which occurs in a certain time and space, and we address the beginning of the event, we use "-hazimeru(A)". On the other hand, when we refer to a micro-level event which consists of a macro-level event, and we address the occurrence of the event, we use "-hazimeru(B)".

1. はじめに－「始める」の2種類の受け身－

Nishigauchi (1993) では、アスペクト動詞「～始める¹⁾」においては2種類の構造が可能であり、その構造の違いが受動文になった場合に顕現化することが明かにされている。例文(1)が本動詞「読む」にアスペクト動詞「始める」が付加したものに受動形態素「(ら)れる」が付加した構造であるのに対して、例文(2)は「読む」に「(ら)れる」が付加したものに「始める」が付加した構造である。

- (1) この本が 読み-始め-られ-た。
- (2) この本が 読ま-れ-始め-た。

Nishigauchi (1993) では、これらの意味的な違いについては、例文(1)が「(読

* "Hon ga yomi-hazime-rare-ta" and "Hon ga yoma-re-hazime-ta"

(Mariko NISHIKAWA)

** 言語文化研究科言語コミュニケーション論講座

¹⁾ Nishigauchi (1993) では、「～始める」・「～続ける」はコントロール構造とレイジング構造の両方をとるタイプのものだとしているが、本論文では「～始める」に限ってとり扱うことにする。

書サークルのような場所で)学生たちが同時に同じ本を読み始めた」という意味であるのに対して、例文(2)は「ある本が人々の関心を引き始めたということ想像させ、単に本を読むというイベントを意味しているのではない」と述べている(訳:西川)。

2. 「始める(A)」と「始める(B)」－「動作の開始」と「事象の生起」－

柴谷(1978)・久野(1983)では「～始める」というアスペクト動詞を含む構文の深層構造には次のような2つのタイプがあることが主張されている。

- (3) 太郎が〔(太郎が)本を読み〕始めた。
- (4) 〔太郎が本を読み〕始めた。

柴谷(1978)によると、例文(3)の場合の「始める」は、「(本を読む)ことを始める」という意味の他動詞用法の「始める」であり、「始める」の主語は文主語の「太郎」である。それに対して例文(4)の「始める」は、「(太郎が本を読む)ことが始まる」という意味の自動詞用法の「始める」であり、その主語は、文主語の「太郎」ではなく、「太郎が本を読む」という文全体である。柴谷(1978)はさらに、前者の「始める」がある人の動作を表現しているのに対して、後者の「始める」はある事象の起こりを表現している、という考察をおこなっている。以下、動作の開始を表す他動詞用法の「始める」を「始める(A)」、事象の開始を表す自動詞用法の「始める」を「始める(B)」とする。

ここで、動作の開始を表す「始める(A)」が受動化される場合には「始め(A)-られる」という形になり、事象の生起を表す「始める(B)」が受動化される場合には「られ-始める(B)」という形になるというわけである²⁾。

本稿では、2種類の「始める」の意味的な違いを、受動化構造に現れる意味的な違いを観察することによって明らかにするのが目標である。

3. 「始め(A)-られる」と「られ-始める(B)」

この章では、2種類の「始める」の違いを付加するイベントの違いに求める。まず、イベントにおいて「行為主体が特定か、そうでないか」・「イベントが一時

²⁾ それぞれの構造の派生についての統語的分析はNishigauchi(1993)に依拠する。

的なものか、持続的なものか」という観点から両者を比較し、最後に「事象」というイベントの特徴について考察する。

3.1 行為主体の特定性

- (5) 本が読み始められた。
- (6) 本が読まれ始めた。

例文(5), (6)を比べてみると、例文(5)には、特定の「人」が特定の「本」を読み始めた、という解釈が強いのに対して、例文(6)では、本(というもの)を読むという行為が始まった、ということについて言及されているだけで、行為主体については特定化されていない。

したがって、次の例のように行為主体を特定した場合、

- (5') 本が太郎によって読み始められた。
- (6')?? 本が太郎によって読まれ始めた。

例文(5)に特定の行為主体「太郎」を付加した例文(5')は可能だが、例文(6)に特定の行為主体「太郎」を付加した例文(6')は不自然な文になる。

しかしながら、次の例文では、「19世紀の人々」と行為主体が特定化されているにもかかわらず、(7)は不可能で、(8)は可能である。

- (7) * 本が19世紀の人々によって読み始められた。
- (8) 本が19世紀の人々によって読まれ始めた。

これは、一見行為主体が「19世紀の人々」と特定化されているようにみえるが、実は人物が特定化されていないことにはかわりないからだと思う。

以上のことから、動作・行為を始める主体において、「始める(A)」・「始める(B)」それぞれには違いがみられ、「始める(A)」の場合には、特定の行為主体の存在が認められるのに対して、「始める(B)」の場合には、動作主は不特定の場合が自然なようである。

3.2 一時的なイベントか持続的なイベントか

心情を表す動詞の場合には、特定の行為主体が存在する場合でも「始める(A)」の受動化構造をとることはできず、「始める(B)」の受動化構造をとるようである。

(11) *大助は花子から嫌い始められた。

(12) 大助は花子から嫌われ始めた。

(13) *殺人犯のうわさが立って以来、五郎は友達から恐れ始められた。

(14) 殺人犯のうわさが立って以来、五郎は友達から恐れられ始めた。

これら心理的な行為は、意志形が作れないということに示されるように、意志的な行為でない例としてよく挙げられる。

(15) *大助を嫌おう。

(16) *五郎を恐れよう。

この事実から、「始める(B)」は意志的な行為には付加されない、といえるのだろうか。

心情を表す動詞でない場合でも、「始める(B)」の受動化構造しかとれないものがある。

(17) *大助・花子はお客さんから認め始められた。

(18) 大助・花子はお客さんから認められ始めた。

(19) *花子は桃子からいじめ始められた。

(20) 花子は桃子からいじめられ始めた。

これらの動詞は、次の例文(21), (22)にみられるように、意志形で表されることから、心情動詞とは異なり、意志的な行為を表すものだといえる。

(21) 大助・花子を認めよう。

(22) 花子をいじめよう。

この事実から、「始める(B)」が付加するイベントが意志的な行為でないということは、十分条件ではあっても必要条件ではないことがわかる。それでは、「始める(A)」の受動化構造がとれないこれらのイベントの共通点はどこにあるのであろうか。

これらに共通するのは、次の文が示すように、これら全てが持続的な行為であるという点である。

- (23) {ずっと／* 1時間} 大助を嫌い続けた。 *大助を嫌い終えた。
 (24) {ずっと／* 1時間} 五郎を恐れ続けた。 *五郎を恐れ終えた。
 (25) {ずっと／* 1時間} 大助・花子を認め続けた。 *大助・花子を認め終えた。
 (26) {ずっと／* 1時間} いじめ続けた。 *いじめ終えた。

したがって、このタイプの文に「1時間」や「終える」のようなプロセスの限界を示す表現は付加不可能である。

それに対して、「始める(A)」が付加するイベントは、限界のあるプロセスをもった一時的な行為である。したがって、次の例文のようにプロセスが想定しにくいイベントには付加されにくい。

- (27)?? 動物が殺し始められた。
 (??動物が殺し続けられた。 *動物が殺し終えられた。)

一方、「始める(B)」にはそのような制約はない。

(28) 動物が殺され始めた。

この場合は、「動物が殺される(動物を殺す)」というイベントが一時的なものではなく、持続的なものとしてとらえられていると考えられる。

以上のことをまとめると、「始める(A)」イベントが限界のあるプロセスをもった一時的なものであるのに対して、「始める(B)」イベントは限界が問題とされ

ない持続的なものだと見える。

3.3 「事象」とは

これまでの観察から、「始める(A)」が付加する典型的なイベントは、限界のあるプロセスをもち、かつ、ある特定の動作主によってその時・その場所において一時的に行われたものであった。それに対して、「始める(B)」が付加する典型的なイベントは、持続的なものであった。

この節では、特に、「始める(B)」の付加するイベントを詳しく観察することによって、「事象」のとらえ方について考察したい。

3.3.1 時空間を異にして複数生起可能なもの

次の例文は、限界のあるプロセスをもった一時的なものであるので、「始める(A)」の受動化構造しかとれない。

- (29) 隣の空き地に1軒の家が建て始められた。
 (30)?? 隣の空き地に1軒の家が建てられ始めた。

しかし、次の例文のような場合には、「始める(B)」の受動化構造も可能である。

- (31) 隣の空き地に家が建て始められた。
 (32) 隣の空き地に家が建てられ始めた。

例文(31)は、例文(29)のような解釈がされやすいが、例文(32)の場合は、隣の空き地がかなり広いもので、そのあちこちに何軒かの家が建ち出した、という解釈が強い。「家が建てられる(家を建てる)」というイベントが(隣の空き地の)あちこちで複数起きている、という解釈である。

- (33) 本が読み始められた。
 (34) 本が読まれ始めた。

例文(34)の場合にも、「本が読まれる(本を読む)」というイベントが時空間を異にして、複数生じている、という解釈が自然である。この場合、例文(32)の場合

よりも、イベントの生じる時空間の範囲がかなり広く解釈される。いずれにしても、「始める(B)」は時空間を異にして複数生起可能なイベントに付加される、ということがいえそうである。いいかえれば、時空間を異にして同じイベントが複数生じている、ということを表す場合に「始める(B)」が用いられる、ということである。

たしかに、3.2で「持続的行為」を表すイベントとして挙げた例文についても、時空間を異にして複数生起可能なもの、というとらえ方で説明可能である。

- (35) 大助は花子から嫌われ始めた。(=12)
- (36) 殺人犯のうわさが立って以来、五郎は友達から恐れられ始めた。(=14)
- (37) 大助・花子はお客さんから認められ始めた。(=18)
- (38) 花子は桃子からいじめられ始めた。(=20)

ただし、例文(35)、(38)のように、特定の行為主体による行為の場合には、複数生じるそれぞれのイベントの生起が同時に別の空間で生じることはない(不可能である)。たとえば、例文(38)において、「花子が桃子からいじめられる」という場合には、それが他の場所で同時には起こり得ない。それに対して、行為主体が多数存在する例文(32)、(34)、(36)、(37)のような場合には、同時に別の空間で同じイベントが生じることが可能である。たとえば、例文(36)において、「五郎が友達から恐れられる」ということが同時に他の場所であってもよいのである。しかし、いずれにしても、同じイベントが時空間を異にして複数存在している、ということにかわりはない。

以上のことから、「始める(B)」が付加するイベント、すなわち、「事象」というのは、時空間を異にして複数生起可能なものである、ということがいえそうである。これに対して、「動作」というのは、時空間を固定して1回限り生起するもの、と考えられる。

3.3.2 プロセスを問題にせず、固まりとしてとらえられたもの

3.3.1で、「事象」というものを、「時空間を異にして複数生起可能なもの」としてとらえたが、次の例文のように、時空間を異にして複数生起するものというとらえ方では説明できない例がある。

- (39) 卒業式に在校生たちによって「蛍の光」が唄われ始めた。
 (40) オリンピックで聖火が灯され始めた。

例文(39), (40)ともに、それぞれ「『蛍の光』が唄われる」・「聖火が灯される」というイベントは、特定の卒業式、オリンピックにおいて行われる一回限りのものであってもよい。

- (41) 卒業式に在校生たちによって「蛍の光」が唄い始められた。
 (42) ? オリンピックで聖火が灯し始められた。

「始める(A)」の受動化構造をとった場合(例文 41, 42)と比較してみると、例文(39), (40)の場合には、「『蛍の光』を唄う」・「聖火を灯す」というプロセスについては全く問題にせず、「在校生たちが『蛍の光』を唄う」・「聖火を灯す」というイベントを1つの儀式としてとらえ、ひと固まりのものとして扱っていると考えられる。

4. 「動作の開始」と「事象の生起」について - まとめ -

以上、2つの「始める」の意味の違いをそれぞれが付加するイベントの違い、さらにイベントのとらえ方の違いに求めた。

簡単にいってしまうと、イベントのプロセスを問題にするかどうかの違いである。イベントのプロセスを問題にし、プロセスの開始を示す場合に「始める(A)」が用いられる。それに対して、プロセスは問題にせず、イベントをひと固まりのものとしてとらえ、その生起を示す場合は「始める(B)」が用いられる。したがって、「始める(A)」の付加するイベントは、限界のあるプロセスをもった一回限りのものであり、「始める(B)」が付加するイベントは、そのイベントの生起だけを問題にするものであるから、一回限りのものでなくてもよく、時空間を異にして複数生起可能な場合が多い。

5. 関連事項

5.1 「終え(A)-られる」と「*られ(B)-終わる」

Nishigauchi (1993) では、アスペクト補助動詞「～終わる」は「～始める

(続ける)」とは異なり、「終え(A)-られる」という受動化構造をとるのが普通だとしている³⁾。この理由も、動作を問題にしているのか、事象を問題にしているのかということから説明できる。すなわち、「終える」というのは動作の終結について用いられ、事象の終わり(「生成」に対して「消滅」)を述べる場合には、「～なくなる」という別の表現がとられるからである。

(48) 本が読まれなくなった。

5.2 使われやすさ

「動作の開始」を述べる場合には、実際に話し手がその動作の開始を確認している必要があり、動作主は特定化される。このように、特定の動作主が存在する場合には、日本語では動作主を主語においた能動文による表現の方が自然であり、受動文はかなり不自然になる。それに対して、「事象の生起」を述べる場合には、誰が始めたということよりは、むしろ事象が開始したということ述べることに主眼があるので、動作主は明示されない場合が多い。動作主が背景化される場合には、日本語では受動文の形で表れるのが自然だと考えられる。このことから「られ-始める(B)」は使われるが、「始め(A)-られる」の方はあまり使われないことが予測される。

³⁾ Nishigauchi (1993) では、「～終える」は、コントロール構造のみをとるものとして、「～始める」・「～続ける」とは異なったタイプに分類し、その違いは受動化構造に現れるとしている。「～始める」・「～続ける」が「始め/続け(A)-られる」と「られ-始める/続ける(B)」の両方の受動化構造が可能であるのに対して、「～終える」は「終え(A)-られる」の受動化構造を強く志向する、と述べている。ただし、次の例のように例外もみられる。

学生が全員殴られ終えた。 (Nishigauchi (1993) の例文より)
 すべての曲目が演奏され終えた。 (国立国語研究所 井上優氏のご指摘より)
 朝刊が配られ終えた。

これらは、「それぞれの学生が殴られる」・「それぞれの曲目が演奏される」・「それぞれの新聞が配られる」行為を1つのイベントとしてとらえ、それぞれのイベントの集合体として「学生が全員殴られる」・「すべての曲目が演奏される」・「新聞が配られる」というイベントをとらえ、その終結を述べた表現だと考えられる。このようなタイプの構文については稿を改めて考察したいと思う。

参考文献：

久野 暲 (1983) 『新日本文法研究』 大修館書店

柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 大修館書店

Nishigauchi (1993) “Long Distance Passive” in Nobuko Hasegawa ed.

Japanese Syntax in Comparative Grammar

: Kurosio Publishers, pp. 79-114

付記：本稿は、平成6年度日本語教育学会春季大会で発表したものをまとめ直したものである。本稿を書くにあたって、多くの方々から有意義なコメントを頂いたことを誌面を借りて感謝いたします。